令和2・3年度「『未来を生き抜く人財育成』学力保障スクラム事業」の取組　B小学校

現状と課題

令和元年度（事業前）からの比較(算数)
第５学年(令和元年度)
・学年では５－Ａで+３であった。中間層から上位層は+４であったが低位層は+３であり伸びが小さい。個別に応じた支援が必要である。
・柔軟的方略、作業方略、認知的方略、努力調整方略は－０．１であり学習方略に関しては課題が多い。
第４学年(令和元年度)
・学年では４－Ｃであり県と比べると－３と差がある。さらに記述式の正答率が３３．９と－２２．５である。思考したことを表現することに課題が見られる。

現状と課題をもとにした仮説

・授業における習熟に応じた指導や授業以外の放課後学習教室での個に応じた支援を行い、基礎・基本を定着させることで、学習に対する自信と意欲が高まるだろう。
・担任と加配教員が連携した指導を行うことで、児童一人一人の学習状況や定着に対する理解が深まり、一人一人に適切な学習環境をつくることができるだろう。
・習熟に応じた指導の充実を図ることで、個の課題に応じたスモールステップや発言の機会の増加が図られ、どの学力層の児童にも伸びが見られるだろう。
・友達にやり方を聞いたり、友達と答え合わせをしたりするなど、協働して学ぶ姿勢を育むことで、対象児童以外の児童にとっても学習内容の深い理解につながり、学力の伸びにつながるだろう。

事業実施報告

令和2年度
1学期：Ｂ小学習教室(放課後)
習熟度別学習
校内研修　朝自習の取組
2学期：校内公開授業・研究協議
スクラム事業要請訪問(5年)
3学期：次年度に向けた取組検討
令和3年度
1学期：Ｂ小学習教室(放課後)
校内研修
(学力向上、質問紙調査の活用)
少人数学習(習熟度別)
2学期：スクラム事業要請訪問(4.5年)
校内研究授業(質問紙調査の活用)

仮説をもとにした取組内容

全学年での算数科における複数教員による指導の実施

・１、２年生…T.Tによる指導
・３、６年生…担任２名＋専科教員１名でのコース別学習
・４、５年生…担任２名＋スクラム教員２名でのコース別学習
　習熟に応じた指導を充実させることで、発言の機会の増加や個の課題に応じたスモールステップの設定が図られ、どの学力層の児童でも学力を伸ばすことができる。

朝学習におけるまとめる力の育成

　１５分間という短い時間の中で、初見の物語や文章の内容をつかみ、自分の考えをまとめながら書き表すことで、情報をつかむ力や思考を整理して、まとめる力を向上させる。

質問紙調査の活用(令和３年度)

　１年生から６年生まで、年間２回(６月と２月)の実施を計画した。一人一人の長所や課題、抱えている不安などを県学調に加えて把握し、学級経営や教科指導に活用する。
　また、データをもとに手立てを考えた授業展開をすることで非認知能力の向上につながるか、今後向上する手立てとなりうるかに焦点をあてた研究授業を行う。研究協議を通して、効果的な活用を検討する。さらに、結果の個票を活用しながら保護者と共有して、指導に活かしていく。

校内課題研究

「わかる」「できる」を実感する授業の創造～算数科を中心とした言語活動の充実を通して～という主題を設定して、研究授業や公開授業を行う。スクラム事業と校内研究の方向性を合わせ、実態に応じた学習形態を考えたり、授業のねらいを明確にした言語活動の設定を行ったりする。

対象児童への教育的支援【Ｂ小学習教室】

【放課後(毎週水曜日)】
　対象：4・5年生の学習支援を要すると学校が判断した児童
　内容：算数科における補充学習
【夏季休業日】
　対象：4・5・6年生の学習支援を要すると学校が判断した児童
　国語・算数
　・漢字学習の補助　・音読の補助　・読み取りの練習　・書く練習
　・家庭学習の補助　・既習内容の確認　・課題の補助、授業の補習

家庭との連携

　学習面・生活面で学校の目指す目標を保護者にも伝え、学校と家庭が連携して取り組めるように手紙を配布する。２学期後半には、県学調の結果や質問紙調査を使用した学級経営、学習への取組状況に関する実態把握を行い、家庭と情報を共有して家庭学習の習慣化を促進させる。また、行事や日々の活動での児童の様子も伝えながら非認知能力の育成、向上も家庭と連携しながら図っている。

令和2・3年度「『未来を生き抜く人財育成』学力保障スクラム事業」の取組　B小学校

現時点での成果

算数科においては習熟度別学習や少人数での学習を行ってきた。

発展コースでは、課題解決型の授業として個人やグループでの学習を主として児童一人一人が協働的に学びを進めてきた。問題から課題を見出し見通しをもって学習ができた。

標準コースでは、１時間の問題の難易度によって全体での学び、グループでの学びを通して課題に向かって学習を進め、様々な考えに触れることによって学びを深めてきた。

じっくりコースでは、全体で見通しを持ちながら各自で問題解決できるように支援してきた。最も少ない８人での学習を通して、学びに向かう姿勢を育むことができた。それぞれのコースに合った言語活動を設定し「学び合う」という学習集団を形成することができた。

自分で考え気付いたことを交流する学習の経験が、児童の意欲の変容へとつながったと考えられる。スモールステップでの経験を積み重ねたことによる成果の１つである。教師の担当コースを変えたり、単元ごとに児童のコースを変更したりすることで、児童一人一人の学習状況の理解を深めることができた。その結果、実態に合った手立てや授業展開を実践することができ、基礎的・基本的な学習内容の定着を図ることができた。また、低位層の児童を対象に、学習教室を毎週30分実施したことも学習の定着につながった。

算数の授業以外でも、他教科の指導にT.Tとして指導をすることにより学習規律を整えることもできた。個別の支援を行いながら集中して学習に取り組めるようになった。

県学調の伸び（５年生）

	対象児童	５年生（県平均）
国語	4.7	3.1
算数	2.3	3.3

定期テスト（算数）の平均・対象児童と学年（基礎的・基本的な学習の定着）

	対象児童	学年（平均）
知識技能	75%	83%（4年）
	70%	76%（5年）

質問紙調査を活用した学級経営と教科指導
（非認知能力の向上をねらった取組）

県学調に加えて、市販の質問紙調査を行うことで個人の良さや課題点を教師が知ることができた。結果を児童、保護者に伝えたり、手立てや支援を考えるなど学級経営や教科指導に活かしたりすることができた。担任は学級の強みを伸ばしたり、課題に対する取組を行うとともに、個々に合わせた支援を行ったりしてきた。専科教員も研究授業を行いながら非認知能力の向上を図りながら学力向上をめざした研修を行った。学級だけでなく、学校全体での取組を意識した。その結果、年２回実施している校内アンケート（表参照）では、①「最後まで諦めずに頑張っている」②「自信をもっていることがある」の非認知能力に関する項目が4・5年生でポイントが増加している。今後はさらに、質問紙調査の結果を分析し、集団と個人の変容をみながら取組の検証を行う。

校内アンケートの結果（令和３年度）

学年	６月		１２月	
	①	②	①	②
4	78%	84%	81%	85%
5	75%	82%	77%	85%

課題及び次年度に向けて

【課　題】

- 基礎的・基本的な学習内容の定着を図る取組に比べ、発展的な学習の取扱いや思考力の向上を図る取組の内容については、より検討が必要である。また、学力の低位層で見られる児童の伸びに加え、中間層から上位層までの児童の伸びにつながる手立ての考察を行い、効果的な取組を検討する。
- 児童のつまずきから、前学年等にさかのぼった指導を行うために、領域構成を整理し、家庭学習との連携を図った体制づくりの充実が必要である。
- 学び方を定着させるために学校全体での授業の流れを研究し、習熟に応じた授業の変化について、学習内容を踏まえた整理が必要である。教科横断的な視点での学習方略の向上と、全教育活動における非認知能力の向上について、ねらいを明確にして行う。
- 県学調や質問紙調査の結果をどのように生かして学力向上を図っていくか、効果的な活用についてさらに校内で検討していく。
- １年目は校内の体制を整え、２年目は授業について考えながら学力向上を図ってきた。これまでの取組を精査しながら次年度以降も学力向上をねらった取組を行っていく。

縦割り活動の充実【ペア学級】

卒業時の目指す児童の姿を「自分で考えて自分で行動できる」として児童会のスローガンである「みんなでつくるみんなのＢ小～笑顔でつながるみんなの心～」を目指している。

高学年は、休み時間や授業の時間での遊びを中心とした交流以外にも朝学習の時間に低学年に新出漢字など学習のお手伝いも行っている。校内でねらいを明確にしながら児童の自発的な取組を促し、充実した活動を行っている。